

札幌会場

大正期におけるアイヌ民話集

8月6日(火) 14:00~15:30

北海道の義経伝説とアイヌ

8月6日(火) 15:30~17:00

講師

北星学園大学文学部教授 阿部 敏夫



はじめに

最初は、青木純二という大正期に民話集を編集した方を事例にしながら、或いは素材にしながら、アイヌ民話について考えてみたいと思います。後半は、北海道の義経伝説について考えてみたいと思います。今回の講座はこの2つの問題を考える際の糸口を話したいと思っています。この糸口を通して更なる研究が必要だと思っています。基礎的な資料収集状況やその状況の中から考えられること等についてお話ししたいと思います。義経伝説については、小谷部全一郎という方に焦点を合わせながら義経伝説とアイヌ民族問題を考えてみたいと思います。

I. 「大正期におけるアイヌ民話集」について

青木純二という人物について考えたい。青木純二は『アイヌの伝説と其情話』という民話集を大正十三年に編集しています。収録民話は全部で八十七話です。これは北海道札幌の富貴堂書房が発行した本です。今の三越の道路挟んで向かいのところにあった富貴堂からです。そして大正十五年に第百書房という東京の出版から同一内容で出版しています。大正十三年版との違いは、「・・・と其情話」というのが題名から欠落していることです。そして『アイヌの伝説』というふうになっています。内容は同じ。さらに、青木純二は昭和四年に『民族性の研究 アイヌの伝説』という題名でアイヌ民話集を出版しています。目次は、アイヌの民族と情話、民族性に対する諸理論、遺伝と民族性、環境と民族性、教化と民族性、政治と民族性となっています。成光館という東京の出版社から出版しています。内容は、「民族性の研究」の部分は納 武津著になっていますがアイヌ民話集については前二書と同じです。だから大正十三年、十五年、昭和四年、まだその間に出版された民話集があるかもしれませんが、もうちょっと検索しなければならんと思いますけれども、「其情話」があって、其情話が

欠落して、そして「民族性の研究」が付け加わっているのです。この状況を見ると、青木さんの思想の流れ、時代背景的なものがあるのではないかと考えるようになりました。アイヌの伝説ではあるけれども、何か時代とのかかわりの中でアイヌ伝説集が変遷して国民にずっと売られているというところに問題点があるのではないかと考えるようになりました。したがってこの問題点をさらに追究したいと思っています。

同時期に『アイヌ神話』という本を中田千畝が報知新聞社から出版しました。大正十三年です。そして、大正十五年には、工藤梅次郎『アイヌ民話』という本が出版されています。小樽新聞社記者時代です。小樽の工藤書店から出版です。自分の家なんでしょう？青木純二と工藤梅次郎、中田千畝と何らかの関係があると思います。

これらの著書の序文を書いている人、これも面白いんですね。例えば、この中田千畝の場合は、報知新聞の記者で函館に来て、そしてまた全国各地を勤務したという人なんです。そして、アイヌに興味を持った人です。その中田千畝は徳川義親に序文を書いてもらっています。それからジョン・バッチラーも「札幌にて」という序文を書いているんです。工藤梅次郎の場合は安田巖城、それから吉田巖が序文を書いているんです。

このようにみえてくると大正期から昭和にかけて、明治から引き続いていますけれど、「和人」達のアイヌ民話研究あるいはアイヌ民話受容の流れがあるように思います。

しかも、青木純二の著書の序文にくここに集めた「アイヌの伝説と其情話」とは大部分は婦人公論、淑女画報、大阪朝日その他の諸新聞、雑誌に発表したものと、さらに出版にあたって書き加えたものである。>と書いています。ということは、北海道だけでなく、全国の「婦人公論、淑女画報、大阪朝日」の全国紙(誌)に掲載されているということになります。全国的な影響力をもちながら、青木は「悲しき蘆笛」(阿寒のマリモ伝説)というアイヌ民話を創作しています。また大正十二年に小樽新聞社が「本道

の民話」を懸賞募集しています。その一等が「マル藻と姫鱒」です。この話はマリモの童話、今に伝えられております阿寒のマリモ伝説、それを少し継子いじめその他の要素を付け加えながら創作されているのです。このように考えてくると、何人かでそれぞれの分野からみた大正期におけるアイヌ伝説、アイヌ民話の分析とその背景等を研究したいですね。私の課題意識は「和人」の創作、編集した「アイヌ民話集」研究です。

一方では、金田一京助、久保寺逸彦、ジョン・パチュラー、知里真志保、竹熊徳三郎、萱野茂をはじめとするたくさんの方々のアイヌ民族の言葉を大切にしながら、それを更に発展させているアイヌ民話研究者がいます。前述した青木純二をはじめとする方々とは、私が今紹介した人達とは違います。

それで青木純二『アイヌの伝説』の内容をみます。この本は八十七話と先ほど言いました。その内容は、出典が明らかなのは三話だけです。「山の伝説と情話」「海の伝説と情話」からの引用の三話だけです。そして地域別に分類しますと、道南が二十四話、道央に十八話、道北が十一話、道東が八話、東北地方のものが一話、サハリン等の話が三話、そして二十二話が地域名がわからないという状況です。その話の中のアイヌ民族に対しての民話に問題を感じています。松前藩の武士が偉くて、アイヌの人たちが従い感謝するという話で貫かれています。例えば、武田信広の「御馳走」という話です。ちょっと読んでみたいと思います。

「江戸の開祖、武田信広の伝説と物語は非常に多いが、それはまたの機会に記すことにして、ここにはアイヌにまつわる話のみを書くことにする。前に書いた如く信広はアイヌたちを征服したので、ある日のこと、酋長らを城中に召し寄せて酒、飯を出して歓待した。信広もその座にあって杯をとっていたが、その時、いろいろなものが出たうちに竹の輪切りの吸い物と黒い小石を煮て猪口に付けて出した。酋長たちも箸を取って食おうとしたが、硬くて歯が立たない。小石を取って口に入れたけれどとても食うことができないので、どうしたらいいか迷っておった。ところが信広はやがて箸を取り上げ、竹の吸い物をさも上手そうに食べつつ、杯を重ね、また猪口に盛られた小石もむしゃむしゃと食べるので、酋長たちは心の内に驚き、こんなに硬いものを食べるのなら、あの大將はよほどの豪傑に違いないと舌を巻いたという。その時、竹の輪切りも、信広だけは竹の子の吸い物を食い、小石と見せたのは、自分だけは黒豆の煮たのを食べたのである。そしてまず酋長たちの度肝を抜く計画を図ったのだが、これがまた非常な評判となってアイヌたちは『とても人間とは思われぬ人だ、豪い大將だ』と、尊敬するようになったという。」

この民話をどのように考えますか？私はこの伝説を書いた人は無神経だと思いますね。更に別の民話を紹介したいと思います。「髯塚」という民話があります。

「快男児近藤守重が黄海を超えて千島に渡り、次いで航海巧みなる怪漢高田屋嘉兵衛が貢船で江戸と行き通うこととなってからアイヌたちは非常に恵まれた。女たちの耳朶にかけ、イヤリングですか、今なんていうんですか、こ

れ輪ですね、輪なんかも金銀真鍮なども日本から来るようになり、また衣食は更に、酒たばこから漁具までも輸入されるようになったのでアイヌたちはめずらしいものを見たり食べたりすることができたので非常に喜んでおった。アイヌたちはそのような人をエンドカムイと尊称して、その恵みのありがたさを感謝するようになったという。そして、忸怩のアイヌたちはこの感謝の念を具体的に表すために髯を剃ってしまった。今もその時の『髯塚』が残っている。」

それから「田村麿とアイヌ」の民話を紹介しましょう。

「桓武天皇の御世に陸奥のアイヌが興起して領民を乱し、略奪を専らにした。そして他の部落のアイヌを集めて駿河の国まで押し寄せた。朝廷にはこれが追討のご相談があったが、勅命は坂上田村麿に下った。田村麿は身の丈五尺八寸、怒るときは猛獣も畏れ、笑うときは子供もなづくといわれたほどであった。当時朝廷の部下の中でもっとも英名の高かった人である。天皇は親しく田村麿を召され、征夷大將軍に任じられ節刀を賜った。將軍は勇躍して京都を出発し、途中の賊などを平らげて、東国さして進んだ。これを聞いたアイヌは田村麿の武名を恐れて、遠く津軽の奥に逃げていったので、將軍は無人の境を行くがごとく、アイヌを追いつちして津軽の奥深く這入った。当時のアイヌの酋長、ひとり悪路王といい、ひとり恵美の高丸といった。いずれも猛悪な獣のごときもので、神変不思議の魔力を持っていたので、さすがの將軍もたやすく滅ぼすことはできなかった。『これは人力をもっては勝つことができない。一に神明の援助を乞わなくてはならない。』と將軍は思いついたので、一心に神々を念じた。中でも鹿嶋の神はわが国の武神であるから將軍は平素から信仰したのであるが、ある夜の夢に、『わが力を以て、アイヌをば必ずや滅ぼさせるであろう』とお告げにあったので、將軍は非常に喜んで全軍の士気一層振った。しかるにアイヌは將軍の威勢に畏れて昼は山の奥深く隠れてなかなか出てこなかった。それで思慮深き將軍は竹をもって人の形を作り、それに紙を貼って彩色をし、笛や太鼓を打ち鳴らしてアイヌを誘き寄せ、かくしてところどころのアイヌを討ち殺した。ある日、アイヌの酋長の恵美の高丸は馬にまたがって攻めてきた。その日は両軍入り乱れて戦ったが、アイヌの目には不思議なものが見えた。それは田村麿の軍勢の先頭に見慣れない一人の神のようなものがいて、アイヌの射だす矢をことごとく一手に受けて投げ返すので、アイヌの兵はこの矢に当りみるうちに死骸の山を築いた。これはきっと神であろう、こう言ってアイヌは畏れた。高丸は味方の敗軍を心もなく思い阿修羅のごとく両手に刀を振って討ちかかってきた。將軍は遙かにこの様を見ていたが、手に持てる弓に矢を番えて放すと、過たず高丸が胸にぐざと立った。さすがの高丸も馬上にいたまらず、ドンと落ちるのを將軍は駆け寄って首を取った。酋長を打たれたのでアイヌの軍はひとたまりもなく壊乱した。この日の一戦で賊軍はまったく鎮定してしまった。將軍は鹿嶋の神の加護に感泣してこの御礼のために神社を建てようと思った。そして、士卒を率いて雁泊のほとりを通ると、沼の底に一寸ばかりの鬼の

首が見えた。將軍は馬を留めて、『汝は何者であるぞ』と問うた。すると沼の底から厳かなる声がおこって、『俺は恵美の高丸が霊気である。汝に怨みを返さんためここに待っていたのだ』と打ってかからんとした。將軍は少しも騒がず、腰なる剣を抜いて高丸の首を斬ると、沼の水はたちまち血の色になった。そして悪鬼の影も消えてしまった。將軍は沼のほとりの深山に分け入り、三丈あまりの胡桃の大木の根に腰をかけて、士卒と共に休息された。そしてこの林の中に神社を建てようと、持っていられた藤の鞭をその印に胡桃の木の傍に立てておいた。するとその藤の鞭に根が生え、段々伸びて胡桃の大木にまとわりつき、花が咲いて、遠く望めば紫の雲のようであった。この林の近くに一つの村があった。沼洲村といていたが、この藤の花が咲いてから藤咲村というようになった。將軍は胡桃の大木の根を取って、鹿嶋の神の尊像を作り、これを津軽の守護神として、はるかに京の方に向けて安置し、そこに立派な神社を作って祀った。これが今の藤崎村の鹿嶋神社である。この神社の境内は周囲数里にわたっていた。後に、元和三三年の夜、この藤の蔓は一夜のうちに同じ林続きにあるひとつの村に伸びた。それで当時の人は、これを神の藤といってこの村を藤越村と呼ぶようになった。』

だんだんこう読んでいっているうちに腹が立ってきませんか。今読んだのは三話ぐらいですけども、こういう形のものがアイヌの伝説という形で伝えられていたわけです。しかも、これは大正、昭和の初めだけじゃないんですよ。戦後できた、名前を挙げたら支障がありますが、ある高名な方が監修している「北海道の昔話」には、この信広の「御馳走」の民話が収録されています。アイヌ文化理解は以上のような状況です。アイヌ民族の人達とそれを見る和人の視点というのは私が解説するまでもないほどにはっきりしていますね。この影響力たるや、私は大変なものであると思います。この問題をやっぱり取り上げないで、ある意味でアイヌ文化理解というのはないんじゃないかとも言えるんじゃないかと思っています。

今度はスズランの問題についてももう少し考えてみたいと思います。青木純二の「アイヌ伝説と其情話」の「血に咲く鈴蘭」の伝説を最初に紹介したいと思います。

「血に咲く鈴蘭」伝説は函館から二里ばかり離れたところに銭亀澤という所がある。その場所にいくと、ちょうど五月の末、香りも高く、いとも傷しく白く咲くリリーの花がたった一箇所真赤に咲いて昔の恋の名残りを留めて居る。昔此の村の酋長の娘にカバラベという珍しい美人が居た。同じ村にキロロアンという青年があった。若い娘と若い男の仲にはいつ知れず恋が成立した。キロロアンは村の猛者として知られていた。それは秋近い日の事、青年はブシを塗った毒矢を手にして平常の通り熊狩りに出掛けた。一頭の大熊を見付けて彼は毒矢を發矢と放つとそれが熊の足に命中した。熊は一声高く唸るや青年を目掛けて躍り掛かった。彼は非常に驚いて直ぐマキリ（小刀）を手にして熊の腹に飛付いて、ぐさりと許りに突き立てた。その時熊の手は青年の横腹を叩いて居た。熊が毒矢とマキリの為にその場に倒れた時青年も同時に哀れ血に染まって倒れて仕

舞った。次の朝村人が之を発見して大騒ぎを始めたが、その事を聞いた娘は驚いて涙さえ出なかった。彼女は青年の傍に走り寄って、「キロロアン様」と幾度も叫んで居たが、やがて青年の手にして居たマキリを取り、自分の咽喉にぐさっと突きさした。娘の咽喉からは赤い恋の血が溢れ出て、青年の血と一緒に流れた。そしてその血は鈴蘭の花を真赤に染めた。鈴蘭の花は未だに赤い血に染まって、毎年毎年咲いて居る。そして恋の成立する花として今でも若い男女が摘みに出掛ける。』

悲恋物語ですね。次は昭和五十六年の新しい伝説です。この伝説は読みませんけれども、やはり函館の銭亀澤舞台にして書いています。宇賀の浦といいます。これはアイヌの娘と松前藩の若い武士との悲恋物語ですね。松前藩がアイヌの人たちを攻めていく。そこに恋する娘がいる。お互い戦争になって、そして最後に二人は別れるのです。最後の個所を紹介いたします。

「夕日がまっかに宇賀の浦をそめたとき、このたたかいはおわりました。死んだ人やけがをした人をつれて、ひきあげるとき、ふたりの手がどうしてもはなれないので、穴を掘って、そこへ葬りました。戦いが終わり、春になって宇賀の浦の原野は、またスズランの白い花でみごとにおおわれましたが、ふたりを埋めたところには、まっかな花をつけたスズランが咲いていたといいます。ふたりの胸の血が、白いスズランを染めたのだと言い伝えられています。』

この話を、青木民話を土台にして、そして再話していますね。松前藩の武士との関係の中で稀有なトーンですね。工藤梅次郎の話もそうなんですね。工藤民話の場合はスズランの話は「若い娘と若い男とが鈴蘭の花を手にして恋を囁きながら歩いて行った。娘の名はサンバスク、男の名はアンリシカといった。」と主人公を紹介し、最後の方がどうなるかという、「夜は薄い霧が星影を包んで森影暗いその中で二人は、手にしていたマキリを取り出して、グサと咽喉を突いて共に自害を遂げた。赤い恋の血は流れ出て、白い鈴蘭の花敷を真赤に染めた。恋の成立の花として、若い男女からもてはやされる鈴蘭の花—アイヌ達は之をヌツプキナと呼んでいる。」これも悲恋物語ですね。また、長万部の話は、「黒岩コタンと室蘭の絵鞆コタンとの間で仲が悪かった。だけど、その息子と娘が恋仲になっちゃった。だけど結婚は認めない。そこで、娘は亡くなった。」これも悲恋物語です。更科源蔵・光『コタン生物記』の中では次のように書いています。やっぱり「長万部の野原には一面にリリーの花の咲くある。」となっている。「花が贈る甘い香りに身を酔わせながら、酋長の娘は真っ赤な夕日を身に浴びながら彷徨っていた。その姿は女神よりも神々しく美しかった。」彼女はそういう具合にして歩く。そして追かけられてきた若者があるんですけども、それを助けるのです。そして、それは日本という国の猟師だったです。そしてそこで恋仲になるんですよ。そして、村に送ったいりんな熊とかその他がやってくるのですが、それをやっつけるためにそれにチャレンジするんですね。この日本の国の猟師が。そして最後に恋する二人は死んでも離れず鈴蘭の花に身を埋め、折り重なって倒れていた。二人の身体か

ら溢れ出た恋の血は、美しくも鈴蘭の白い花を赤に染めた。熊も必死の二人が突き刺したマキリのために悶え死にして、男女の恋の亡骸の横に横たわっていた。」という伝説です。

これも似たような内容です。このように見てきますと、スズランが登場するアイヌ民話イメージはアイヌ民族の文化と同一でしょうか。私は違うと思うのです。「スズラン」といえば銀座数寄屋橋で毎年航空会社が配る北海道のスズランを思い出す。山地や草原に生える多年草で、葉は二枚、花は香りがよく、純白のかわいらしい花を数輪咲かせます。茎は弓なりにしなだれ、さやかに鈴の音が聞こえてきそうです。スズランは多くの人に愛される花ですが、これが生えるような土地は地面の悪いところだそうです。この花には君影草という素敵な別称があります。ちょうど撮影時に朝日や夕日がさし、葉の裏に花影が映し出されました。この瞬間君影草のいわれは、これだと感じました。秋にはオレンジ色の赤い実をつけます。ユリ科の植物です。」という具合に説明に書いてあります。秋の赤い実は、腹を壊すんですね。だから馬も食わない。

「べにすずらん」に関するアイヌ民話があります。和人が創り出した悲恋物語があります。そこで、「すずらん」は、アイヌ名はセタキトといい、セタは犬、キトはアイヌネギ（すなわちギョウジャニンニク）、すなわち犬のネギの意味だそうです。アイヌ民族にとってアイヌネギは大切な食べ物であったが、生育状態の良く似ているスズランは食用とはならないので、「セタキト」と呼んでいたようです。このことは私以上にみなさんがご存知だと思います。知里真志保編集の辞典の中では、葉が似ているくせに食用にならぬというので、「犬のギョウジャニンニクの葉」とか「キツネのギョウジャニンニクの葉」とか悪口を言ったのであると解説してあります。和人の持っているスズランに対するイメージ。そしてアイヌ民族の持っているスズランに対するイメージ。違いますね。ところが、アイヌの伝説として伝えられている民話は、これは見事に一緒になっています。ところで「べにすずらん」という植物はないんだそうですね。しかし赤インキに鈴蘭を入れて赤くするとべにすずらんになります。帯広のNHKの記者がべにすずらんを発見したと新聞に載ったことがあります。その内容は説明されていません。よく似た花にベニバナイチヤク草というのがあります。私、厚真町のトンニカのあたりを調査に行ったんです。確かにスズランに似ていて、真っ赤です。図鑑を見ますとよく似ています。けれどスズランじゃない。そこで仮にベニバナイチヤク草としてアイヌの伝説として表現されますと、和人の世界のスズランに対するイメージ、しかもいろいろな恋の、悲恋の、血が一緒になって赤いスズランになるという和人のアイヌ伝説とは違和感を感じますね。

そこで、厚真町の絵本のことです。これは厚真町のふるさと昔はなし絵本です。昭和六十二年に発行されたものです。絵本は正統二冊あります。続編の中にこういう話があるんです。ちょっと読んでみますね。「べにすずらんになったメノコ」というんです。

「その昔、厚真川の上流の方にトンニカというコタンが

あった。この酋長のオタクミは勇敢で熊狩りの名人であったが、普段は物静かで仲間から大変に慕われていた。オタクミには美しく心やさしいトコンマという娘がいた。コタンの人たちは美しいトコンマを平和の神様の使いと信じていた。事実トコンマが生まれてからは、他のコタンと一度も戦が起こらなかった。人々は厚真川に小船を浮かべて漁をしたり、狩りをして平和な日々を送っていた。ところが、ある日、日高の戦いの好きなコタンがトンニカコタンの侵略を企て、十年以上も続いた平和な生活を一瞬の間に打ち壊してしまった。オタクミは部下を率いて果敢に戦ったが、ついに力尽きて倒れてしまった。オタクミはトコンマを呼び寄せ、この仇を必ず討ってくれと頼んでこの世を去った。トコンマは敵討ちを誓い、残った仲間を従えて勇ましく敵陣に突進した。血の雨が降る戦いの中でも美しくまばゆいトコンマの姿は戦場に咲いた大輪の花のようだったという。しかし、味方は次々に倒れ、トコンマも囚われの身となってしまった。その美しさに命だけは奪われなかったが、父の敵討ちをできなかったトコンマは、嘆き悲しんで自ら乳房にタシロを突き刺し、父の後を追った。ところが不思議なことにトコンマの真っ赤な血はとどまることなくこんこんと流れ続け、やがて小さな沢を作った。それ以後、トコンマが死んだこの沢の近くに咲くすずらんは赤く染まるようになった。そしていつしかこの鈴蘭のことをべにすずらんと呼ぶようになった。」

この厚真町の開拓絵物語は全町民に配布されたんでしょうね。私は絵本の舞台の場所を尋ねました。厚真町のこの沢はどうなのか。トンニカコタンはどうなのかと尋ねました。沢に、いろいろとべにすずらんがあったというから、尋ねて歩いたんです。わかりませんでした。このようにいろいろと訪ね歩いてみますと、このアイヌ伝説は、和人の創作ではないかと思うようになりました。前述したように別の民話は、函館の銭亀澤のところあたりにべにすずらんが咲いたといひます。函館地方の古い地質図を見ますと、砂鉄の分布に気が付きました。銭亀澤あたりの山のちょうど中間ぐらいに砂鉄の分布があるんですね。砂鉄だったら白いスズランが咲いたら、その砂鉄を吸い込んで赤く咲いているのでしょうか。という具合に見てくると、私達は「アイヌ伝説、アイヌ民話」と発行されているものに厳しい見識を持つことが必要ではないかと思ひます。このような現状をアイヌ文化の変容だと考えていいんでしょうか。アイヌ文化の変容だと言うならば、アイヌ文化をあまりにも侮辱したことになるんじゃないでしょうか。だが、案外それがどんどん広げられているというところに問題があるんじゃないですか。そしてなんとなく、あゝ悲しいねって、悲恋の若者たちが一緒になれればねっていう感じ方になっています。

同じような問題は、阿寒のマリモ伝説にもあると思ひます。いろいろ調べてみたら、この青木純二の大正十三年本がネタ本ですね。ちょっと読んでみますか。マリモ伝説。遊覧船に乗って開かれます。そしてアイヌの、阿寒湖のアイヌ伝説なんて伝えられています。小樽新聞社の懸賞募集北海道の民話として粉飾されてきています。この本のと

ころをちょっと読んでみたいと思います。題は次のように書いています。

悲しき葦笛。「釧路の北方に茫漠たる釧路平原を見下ろして、夏でも白く雪を頂いている夫婦山がある。雄阿寒岳・雌阿寒岳がそれである。女婦の山の中間には、千左の秘密を青藍の水に湛えて崇巖そのもののように静かに横たわっている阿寒湖がある。阿寒湖のほとりにモノベツという小部落がある。今から五百年も昔、モノベツの酋長シバチの娘に、セトナと呼ぶ愛らしいメノコがあった。自分の生まれた土地がすべての世界であり、自分の生まれた村が世界の都であると思っているセトナの胸には、母の愛にすぎ、父の情に頼るより外は不平も哀愁もなかった。家に飽きれば召使の息子マニベの肩に乗って山によじ登り、谷に下りなどして無邪気に日を送った。深藍の湖の水のような瞳の色、豊麗な頬の膨らみはセトナに美人メノコの名を完全にはな得させた。湖のほとりに、白い小さなスズランの花咲き乱れる頃、葦の葉陰に、名も知らぬ小魚の飛び上がる夕暮れからセトナの十六回目の誕生の祝宴は開かれた。炎炎たるかがり火は人々の顔と姿を燃えるように浮き出させた。どぶろくに酔うた部落のものは共に手を取り合って踊り狂った。マニベも我が尊敬する主人の祝いのために心から喜んだ。二十五年の若者。眼光が鋭い、それでいて瞳の中のどこかに溢れるやさしさを持った若者、熊撃ちにかけては誰にも負けをとらぬ剛の若者、彼マニベの鉄のような腕、鉄のような胸は純真な白銀の心とともにわが主のためとあれば文字通りに、火水の中をも辞せない覚悟であった。今日の祝宴、老主人夫婦の満足気な顔、お嬢様も立派に成人なされた。ただ、この上は、酋長として恥ずかしからぬ婿の定まることを願うのみ。彼は祝いの席を離れてただ一人丸木船を葦の中に漕ぎ入れて、日頃好む葦笛を静かに吹き鳴らした。十六夜の月、半ば西に傾いて、丘の上の落葉松の梢に淡く光を投げている。夜更けのそよ風は、湖面に人魚のうろこのような漣を吹き寄せていた。彼の口から出るデリケートな音律は高く低く光の流れるようにすると水面を滑って、森の奥から山の頂にまで上っている。鏡の月は乱れては結び、結んでは砕け、ひとつの船は楽人を乗せて、画中に動く、彼は一心に吹き続けた。東の空に明星きらきらと輝く頃、湖岸のかがり火はひとつ消え、ふたつ消え、尽きせぬ宴の席は夜とともに眠りについた。それから数十日は以前にも増して、歓喜に満ちて過ぎ去った。忠義一途のマニベは、セトナの身の上に事なかれかしと夜となく昼となく影身に添うて守護した。この頃ではセトナの美貌に憧れ、酋長の財と名を慕って、恋の流し目をセトナに送る若者も少なくなかった。マニベはいつとはなしに、副酋長の次男メカニがセトナの婿になることに決まったことを耳にした。同族の男子の唯一の誇りである山狩りにも熊討ちにも他の男に比してはるかに遜色もあり、あまつさえ風聞とても芳しからぬ男を愛する主の夫に一。彼はそう思っ眉をひそめた。マニベにはそれから憂鬱な日が幾日も幾日も続いた。かたわれ月の影薄い夕べにも、葦笛の響きは聞こえなかった。勇ましい熊狩りの壮挙にも彼の姿は見えなかった。彼は一日湖岸の岩に腰掛けて、深い物思い

に耽った。深深たる底しれぬ水は無限の神秘を込めて、怪龍の棲むように瞑想の境を彼に与えた、と電光のように彼の頭を掠めたものがあった。「そうだ！」力強いつぶやきとともに鉄のような胸を丁と打った。と彼ははっとしてみている人はいないかと辺りを見渡した。けれどそこには寂しげに鈴蘭が笑っているのみであった。その夜マニベは小さい時分のように、セトナとただ二人独木舟を、月の碎ける湖面に浮かべた。葦の林を通っても、彼はその一つ折って吹こうとしなかった。小舟は葦をすぎ玉藻の群れを掻き分けていた、怪鳥は葦の森で凶変の前兆のように鳴いた。マニベはこうして二人が船を浮かべるのは辛かった。主従だという自己否定は、主を恋する不忠者という自己幻滅となり絶望となった。マニベにも血はあった。けれどその心の扉を開くにはあまり平穩に過ぎた。ただここにメカニの出現によって、自分は主人をもっとも安全に保護しなければならぬという観念につれて、否定しきれぬ感情を意識しなければならなかった。主の幸福は男らしい男をこそ、その婿にあがめ、メカニごとき痴者を、彼は主人の幸福のために、セトナにメカニを思い切らせようとした。『お嬢様、御身様の婿は、あのメカニに決まったとは本当ですか。』マニベの言葉は怪しく震えていた。穂にもたれかかる十勝石のような漆黒の髪を振りよけて、物凄くまで神々しいセトナは、下僕の言葉に尚意外に面持ちで、『そんなことは露知らぬ。』『其は真実ですか。真実御身様ご存知のことですか、このごろ村ではもっぱらの噂なのです。』『それは露知らぬこと。よし父母の定められたことにしても、あのメカニのような軟弱男子は大嫌い、ことに私には別に想う人が一。』『して他に御身様の想う人とは？』マニベの頬には露が光った。『……………』『その人は誰ですか。』『それは、その人はおまえじゃ。』マニベの顔には急に赤い血が漲った。舟は矢のように湖影を砕いて走った。その夜からマニベは一層憂鬱な若者になった。主と自己と、忠と情と理性と熱情と、彼は自らの行くべき道を知らなんだ。彼は腕拱いて湖岸に引き上げられた舟に寄りかかった。闇を通して怪鳥の声は流れた。六尺の偉丈夫、巨熊と組んでも引けをとらぬモノベツの剛の者も、小刀にてさすべき影もない心の敵に向かっては、ただ太息より他なすべきすべもなかった。彼はセトナの幸福をこそ願へ、セトナを思うとは？、主の娘と契ることは主を裏切ることだ。セトナを思うことも、思われることも痛苦そのものだ。たとえ自分は底知らぬ阿寒の水に沈もうとも、不忠をなお被りたくない。と思うと闇を通してある光明が恵まれたように思った。『なにをなさる。そんなことは私の知らぬこと。離して、離して。』突然な女の声。しかも聞き覚えのあるセトナの凛とした声はマニベを我に返らせた。『すでに親が許したお前の夫。その夫のいうことを？』『いつまで言っても同じこと。お前如き者は大嫌い。そこ離して、離して。』『うむ、これ程言っても、よくも言った嫌いとは。』闇の中に愛する主を抱きすくめた男は、確かにメカニ、マニベは飛鳥のように恋した方に向かって走った。『おお前はマニベ。メカニのヤツが』セトナはマニベの胸にすがった。『もう大丈夫、マニベさえいれば御身様に指一本刺させは

しません。』怪鳥は二度三度血を吐くように闇に鳴いた。『マニベ、お前はこの頃私から逃げよう、逃げようとする。何ゆえ昔のように一緒に遊んでくれないの。』セトナは燃えるような瞳に真実を込めて、若者の袖を取った。一度秘めた思いを打ち明けた女の声は火のように熱かった。『セトナ様、親御様もえらいご心配。早うお帰りなさいませ。』マニベはやさしくセトナの肩に手をかけた。『おお、マニベ、私は、私は。』彼女は更に更に新しい涙に身を震わせて泣いた。『セトナ様、御身様のお心は、なんでマニベの有難く思わぬことがございましょう。だがマニベは御身様の幸いこそ願え、御身様の願いを容れること……、マニベは主人の娘を騙ろう不忠者にはなりたくございませぬ。』マニベの顔は物凄いくど雄雄しく気高かった。理知の力に見事心の敵を倒しつくした偉丈夫は、我が吾が主の鉄をも溶かし去る熱情には眉一つ動かさず、静かに瞳目して阿寒の神に祈りをささげた。『マニベ、マニベ、親の心が、人の口がなにか、私は全てを捨てる。ただ！ただ！』セトナは狂人のように泣いた。けれども彼はその上一言も言わなかった。セトナは今は病床に横たわる身となった。老父母の嘆き、一族の憂いもよそに、マニベの名を呼び続けて、あらぬ方を見つめるかと思えば、昏々と深い眠りに落ちて、身は日ごとに細り行くばかり、ふくよかな頬にはいつしか骨高々とあらわれて形容ものすごいばかりになった。

阿寒の山が紅の衣に包まれたある小春の一日。マニベは薪取りに森に分け入っての帰り暮れやすい秋の日は、はや雌阿寒岳の影に隠れて、東の空にはひとつふたつ星が瞬きだした。と突然かたえの木影から躍り出た人影。『恨みを受ける覚えはない。』メカニの振り下ろす白刃の下を、かい潜ってマニベはすばやく頭から背にかけた薪をうち捨てた。手に一物もないマニベは木立を盾に懸命に戦った。激しい争闘は続いた。白刃はいつしかマニベの手にあった。おっと叫んで突き進んだ一突きにメカニははたと倒れた。胸からは滾々と赤い血潮が噴出した。マニベは人一人を殺した罪を知っていた。彼は一人で湖岸に走り、日頃乗りなれた小舟に乗って漕ぎ出した。ざわざわと白い泡は船首に騒ぐ。彼は数ヶ月ぶりで、愛する葦を取って吹き鳴らした。長い余韻は水面を滑って行く、しばらくして部落の方から、数艘の舟に乗ったメカニ一家のものどもが板木を打ち叩いて近づいてくるのが聞かれた。その夜からマニベの姿は永遠に帰らなかった。ついで数日後セトナは愛人の名を呼び続けて死んでいった。それから湖の奥に生ずる玉藻の中にはきつとふたつ一緒になったのがただ一個あるという、そして阿寒おろしに誘われて湖に方々から女の泣き声に混じって悲しげな葦笛の音が聞こえてくるそうだ。」(山の伝説と情話より)

玉藻とは、まりものことですね。少し長くなりましたが、この民話をどう思いますか。今から七十年前に創作された民話です。この民話をもとにしていろいろな民話が再話されました。また、現在「阿寒のマリモ……」と歌われるようになりました。こういう文化を伝えて良いのでしょうか。しかし伝わっているわけです。この現実知ったもの

が今後どのようにするかということは自ずからわかると思います。もっともっとすばらしいアイヌ民話の世界があるはずなのに、このような伝説が流布されて良いのだろうか。苦々しい思いがするし、読んでいても、悲恋物語で良いのだろうかという思いがあります。阿寒にはトチの実の伝説なんかがありますけれども。青木純二という人の本を通してながらその周辺をうかがっていく。もうひとつ、大正から昭和はじめにかけてアイヌの同化政策ですね。アイヌの方々の問題とか、アイヌ教育の問題とか、そういう問題の中とこの民話とがどういう具合に関連付けていったら良いのでしょうか。以上のような問題も、私のこれからの課題だと思います。そんなことを思いながら、言い方が悪いかもしれませんが、たかが民話集なんですけれども、されど民話集の持っている犯罪性というか、問題性というのをやはりひとつ捉えてみる必要があると思っています。このような民話を生み出した社会背景というものも含めて考えることが今後必要だと思います。

Ⅱ.「北海道の義経伝説とアイヌ」について

[ビデオ上映]

奥州藤原氏の都、岩手県平泉市。およそ八百年前、源義経は兄頼朝に追われこの地で生涯を終えます。平泉の小さい丘にある高館。ここが義経自害の地となっています。毎年八月十六日義経最後の地といわれる平泉の高館で義経の霊をなぐさめる法要が営まれます。平家を滅ぼし英雄となった義経。兄頼朝と対立し、自害に追い込まれたのは壇ノ浦の戦いからわずか四年後のことでした。しかし、東北地方には義経は平泉では死ななかったという伝説が広く語り継がれています。再起をかけて北へ逃れたといえます。義経伝説が残されているのは平泉の北に広がる北上山地です。伝説が伝わる場所を結ぶと、今の岩手県から青森県へ北上する一本の道が浮かび上がります。平泉を逃れた義経が、まず最初に姿を現したといわれているのは、岩手県遠野です。北への旅は厳しい山越えの連続です。そして伝説の中の義経が次に向かったのは、三陸海岸の港町宮古です。義経はこの地に三年三ヶ月の間留まったと伝えられています。宮古周辺には義経の別名である九郎判官から判官と言う名のついた神社やお堂が数多くみられます。義経が立ち寄ったとされる場所を地元の人たちが祀ったものです。義経が宮古に滞在したとされる頃、奥州は大きな歴史の渦に巻き込まれていました。平泉の奥州藤原氏が頼朝によって滅ぼされ、東北の隅々にまで頼朝の支配の手が伸びてきたのです。伝説によれば、義経は間近に迫る追手の気配を感じ、三年三ヶ月を過ごした宮古を去ります。一説には船を使って北へ逃れたともいわれています。頼朝の執拗な追及に、もはや陸上に行くことはできなかったのです。義経一行が食料を得るために上陸したと伝えられるのが、岩手県普代村です。伝説によると一行は、食料が尽きくたびれ果てた姿で一軒の民家に現れます。そこで当時の貴重な主食、稗飯を差し出されます。そして更に北を目指したのです。北へ逃れる義経一行は、遂に奥州の北のはずれ津軽半島の竜

飛崎にたどり着きます。源氏興隆のきっかけを作った義経。しかし、その後訪れた悲劇は、後に民衆に多くの感銘を与える結果となりました。そして生まれた数々の伝説。その中で義経一行は、とうとう津軽海峡を越え、北海道にやってきます。北海道に伝わる義経伝説は百十あまりを数えます。中にはアイヌとの交流を題材としたものや義経の腹心弁慶の伝説もあります。その中で義経が最初に北海道に上陸したと伝えられるのが道南の松前町です。松前町に伝わる義経伝説は、松前城に近く、花の寺としても有名な光善寺に残っていました。光善寺住職の松浦さんが伝説を話してくれました。「義経は三厩から海を渡ってこの松前に着きまして、そして後に欣求院というお寺が建てられたその場所に陣を張ったというのが伝説であります。ここにある義経山という秘話ですね。義経が矢尻で彫ったんだという伝説でありますけれども、これは欣求院の山号を彫った石でありまして、山号石であります。欣求院は明治初年の戊辰戦争でもって火災にあいまして、焼かれまして、廃寺になってこの光善寺に合祀されたんです。その時に義経が津軽海峡を渡るときに大時化にあって難儀をした。それを阿弥陀如来に祈願いたしましたら、時化が治まって無事に渡ることができたといい、それをその報恩感謝のために阿弥陀仏の千体仏を義経自らが刻んで供養したということが伝えられております。本尊さんの隣に安置してありますが、この小さな黒い仏像、これは阿弥陀如来でありまして、鑑定によりますと室町時代の作といわれております。この仏像の由来は定かではないんですけれども、もしかしたら欣求院がこの光善寺に合併になった折に安置されたという、義経が彫った千体仏の一体であるかもしれません。日本海側にある江差町です。ここにも義経の伝説が残っています。江差のシンボルのひとつ、かもめ島。ここにはアイヌと義経のかかわりを描いた伝説があります。義経はアイヌの裏長シカダベのところに身を寄せます。やがて義経はこの地を去るときに愛馬の白馬をこの岩につなぎ船で立ち去ります。愛馬はいつまでも戻らぬ義経を待ちわび、やがて死に、この岩になってしまったのです。また、かもめ島にある千畳敷には、弁慶の足跡とされる大きなくぼみもあります。江差の隣にある乙部町には、川と山にまつわる伝説があります。乙部町を流れる姫川です。この川には義経を慕う静御前にまつわる伝説が残っています。静御前は義経を追い、この乙部までやってきました。長旅で病に侵された静御前がこの地にたどり着いたとき、義経はすでにこの地にはいませんでした。病に侵された静御前はこの川に身を投じます。それからこの川のことを姫川と呼ぶようになりました。義経と静御前はなぜ出会えなかったのでしょうか。実は伝説での義経は姫川の源流がある乙部岳を越えてさらに別の地を目指していたのです。その伝説からこの山は、義経の別名である九郎判官から九郎岳とも呼ばれているのです。義経伝説は日本海沿岸にある町で様々な伝説が語り継がれています。中には義経の腹心弁慶が主人公とされる伝説もあります。寿都町にある弁慶堂です。ここには弁慶が履いていたとされる大きな下駄を模した飾り物が置いてあります。この弁慶堂と下駄は、町の有志が弁慶伝

説にちなんで造りました。寿都町に伝わる弁慶伝説はどのようなものなのでしょう。寿都町市街地の西側にある弁慶岬です。岬の中心部ちょうど日本海を見渡せる場所に高さ三メートルほどの弁慶像が立っています。この像は義経を助けに来る援軍の船を待つ弁慶の姿をモデルに作られました。またこの場所は、義経・弁慶が大陸に渡ったところとも言われています。いわゆる義経成吉思汗説に基づいた言い伝えです。弁慶岬から百メートルほど西側の少し土が盛り上がったところに石碑があります。この石碑には弁慶の土俵跡と書かれています。ここは義経と弁慶が地元のアイヌの人々と相撲に打ち興じたという伝説が残されている場所です。土俵の大きさは周囲二十メートルほどで、弁慶のしりもちの跡が残されていたといえます。寿都町から北東へおよそ四十キロ、岩内町雷電岬にも弁慶の伝説が伝えられています。岩内町にある義経ロマンの会会長の草野さんと雷電岬を訪ねてみました。「草野さん、ずいぶん形の面白い目立った岩ですね。ここからだ本当に岩の形がくっきり見えますね。」「やっぱりまた、違うです。」「あの岩にはどういう伝説があるんですか。」「あれがいわゆる弁慶が魚釣りをするときに刀が邪魔になったのであの岩を一ひねりひねって刀を掛けた。それで弁慶の刀掛、要は雷電の刀掛です。」雷電という地名も義経にちなんで付けられたという言い伝えもあります。義経はアイヌの娘メノコと恋に落ちます。しかし義経は自らの志を捨てることはできなく、メノコとの別れを決意します。その時また来年来るとの約束を残し、メノコとの別れを惜しみます。この地名は、「来年来る」の「来年」が訛って「雷電」と呼ばれるようになったというのです。積丹半島突端の神居岬に伝わる伝説は、変わった形の岩にちなんで語り継がれています。断崖絶壁が続くその先に神居岬の突端があります。そこから更に先に神居岩を見ることができます。高さ四十メートルほどのこの岩には義経のアイヌの娘に対する裏切りから起こった悲劇の言い伝えが残っています。アイヌの娘と恋仲になった義経は、ある晩何も言わず和人の娘を伴って船を出しこの地を去ります。気づいたとき船は、すでに声の届かぬ沖にありました。娘は恨みの言葉「和人の船、婦女を乗せてここを過ぎればすなわち転覆す。」を残し海に身を投じたのです。その姿はやがて神居岩となりました。積丹岬にもアイヌの娘と義経との悲劇が語り継がれています。積丹岬の絶壁に囲まれて聳え立つ女郎子岩です。アイヌの娘シララと恋仲になった義経は、ある月夜に何も言わず船出します。義経を追うシララは海岸で彼の行方を追います。月夜に立つシララは目を凝らしながら沖を見つめます。そこに大波が襲い、シララはそのまま岩となってしまいました。石狩湾沿いの浜益村に残る義経伝説も日本海沿岸の険しい地形、そしてアイヌの人々との関わりの中で伝わります。ルーラン海岸には義経成吉思汗説にまつわる伝説が残っていました。大陸を目指す義経一行がここを通ったとき、あまりの景色のよさに四日間ここに留まったというのです。その後も立ち去りがたくアモイの洞門近くで後ろを振り返って流した涙が岩となりました。浜益村濃屋地区です。ここにはイワツバメにまつわる伝説が残っています。義経が濃

屋で村長のフネハゼに世話になり、やがて義経がここを去ろうとしたとき、老婆が二羽のイワツバメを娘の形見として授けます。しかし、義経との別れを悲しんだ娘は服毒死を遂げます。一方、義経は形見のイワツバメをもこの地に残し去っていきます。そのイワツバメは今も雄冬峠の険しい岩盤に住み着いていると言われています。義経伝説は日本海側だけではなく内陸部にも伝わります。洞爺湖の東側の山道を一キロほど行くと、洞爺村に伝わる伝説の地があります。岩屋と呼ばれるこの地域の山奥にある大きな岩です。高さおよそ五十メートル、この岩は義経岩と呼ばれています。広さが二十畳ほどの岩屋洞窟です。ここには次のような話が伝わっています。洞爺湖にたどり着いた義経一行はここを宿としました。その時、何者かに襲われ、義経も反撃しますが毒矢に当たり洞窟の奥に逃げ込みます。その時異様な音響とともに後光が差し、観世音菩薩が現れたのです。驚いた賊は、それ以来義経の家来となって長く仕えたということです。また、このあたりの岩が赤いのは義経一行が傷や刀の血を洗ったものが染み付いたからだとも言われています。太平洋沿岸にある平取町は、アイヌ文化が栄えた町のひとつです。ここには義経像を御神体とする義経神社があります。「あのですね。義経神社は、古くからこの地に伝説、いろんな形で残っておりまして、それですね、今から二百年ぐらい前にですね、義経像を安置いたしましたして、御神像として、木像の約三十センチぐらいの金緑の義経像が御神体として奉られております。」ここでの義経伝説は、江戸幕府によるアイヌ民族統治のために作られたという説もあります。松前蝦夷御用を命じられた近藤重蔵は、江戸で彫らせた義経の木像をアイヌ民族の守り神として奉納、アイヌ民族の本官様と判官義経を結びつけ、信仰の対象とさせたというのです。アイヌの人々が義経カムイと崇めていた義経はアイヌ民族の始祖オキクルミと重なり、アイヌの人々の間に信仰の根を下ろしていったのです。平取町の義経神社の大きな栗の木には別の伝説が残っていました。「この神木はどういったものなんですか」「はい。義経さんが稗粟を持ってきて、この地域の方々に作らせたということと同時に、栗も持ってきて、これは非常に携帯食にむくものですからこういうものを持ってきて植えた。そのようなことで、今義経さんの神木としてこうやって奉ってあるわけなんです。」「義経公はずっとここにいたわけですか。」「いえ、この地でいろいろそういう生活を、新しい生活をしていた傍ら、やはり若者に武術を教えるというか、そういうことをしておったようでございまして、ある日突然消えたというのは、これは伝説で言われているのですけれども、その教えた若者を連れてここを発っていったというようなことが言われておりまして、最終的には大陸に渡ったというような伝説でございまして。」十勝の大樹町浜大樹地区にある門別川河口です。このあたりは小門別とも呼ばれていました。門別川河口からおよそ三百メートルのところに大門別と言われる地区があります。ここにも義経伝説があるとされています。「先生、ここに残る義経の伝説があるんですけども、幕末の探検家松浦武四郎の東蝦夷日誌の中に義経の記述があるんだそうです。義経

が弓を射る力を試そうと門別の方から射た矢がアイボシマまで飛んできたそうなんですという記述があるんですけども。アイボシマっていうのは今は浜大樹って呼ばれてますね。」「そうです。」「昔はどうだったんですか。」「昔はですか。アイボシマですけどね。それはここはアイボシマというのは、ここはすごく遠いですからね。アイボシマの方ではなくてここから広尾の方に小門別というところがあるんですよ。」「小門別。むこうの方ですね。ここはなんていうんですか。大門別。」「そう、大門別。」「ここが大門別でむこうが小門別」「だから大門別から小門別の方に向けて弓矢を射たのではないかと、こう思うんですけどもね。」「その弓を射る意味っていうのは何かあったんですか。」「弓を射るというのはね、よく昔の侍が戦争に行きますね。戦争っていいですか、今は戦争ですけども。その出るときに弓矢を射ますね。」「そういうのが松浦武四郎の中に記述されていることがきつとそうではなかったかと先生はお考えなんですね。」土屋茂さんの解釈を確かめるためにアイボシマに行ってみることにしました。大樹町アイボシマ地区です。先ほどの門別川河口から車で十五分ほどの距離です。ここからは門別川の河口を見ることはできません。義経が矢を放ったという意味でのアイボシマが、この地域だと確証は結局得られませんでした。同じく太平洋に面した十勝の豊頃町にも義経伝説が残っています。「松浦武四郎の東蝦夷日誌の中記述されています。源義経の上陸した地点であるという記述があります。ということはここから上陸して義経の船がこういう丘のような土手になったということですか。」「その後は今は何となくこうわかりませんが、季節によってははっきりわかるわけですね。そうですか。それが船で、その船を縄で巻きつけたというのが後ろのふたつの、小山のごときふたつあり。これなんですね。なんか何百年前のお話ですけど、不思議な気がいたしますね。」北海道の義経伝説は知床半島にも残っています。この奇妙な岩は蛇頭岩です。ここでの伝説には、弁慶の妹が登場します。弁慶の妹が大蛇に襲われ、飲み込まれそうになったとき、弁慶が怒って大蛇を踏みつけると岩になってしまいました。地元ではこの岩のことを獅子岩とも呼んでいます。それは義経伝説とは関係がなく、その形が獅子に似ているからだといひます。中世の日本を動かした悲劇の英雄義経の伝説は、日本各地で、とりわけ北海道で今も生き生きと語り継がれています。津軽海峡を越え、北の大地に伝わる義経伝説は、その一部でアイヌの人々との交流をテーマに伝えられています。そこには正義としての義経ばかりではなく、狡猾な、あるいは自己中心的な義経も描かれています。北海道の各地には義経は更に大陸に渡ったという言い伝えも数多く残されています。また、川や交通の安全を願う神様としても崇められていました。伝説の中の義経の旅や活躍には終わりはないのです。(北海道文化財団製作ビデオ「北の口承文芸VoL1ー北海道の義経伝説・弁慶伝説一より」阿部監修に関わる)

義経伝説は私たちの調査では、道内百十ヵ所。それまでは七十とか八十とかいうことでした。私は、百二十ヵ所ぐ

らいにはなるのではないかと思います。例えば、『芦別夜話』という本があります。手書きで地元の先生方が作った本です。その中にも義経伝説がありますので、その伝承事情を確かめる作業が残っています。義経伝説に関する、膨大な数の本が江戸時代からあります。そして、義経の死亡自体が非常に曖昧模糊としてるんです。だから義経がそこで死ななかったという説をとる方々が、いろんな事実を上げて書いています。ある人で言えば、義経を調べたことによってそれにとりつかれちゃって、そしてその後どうなったかわからない人もいます。いわゆる義経遺跡研究家という人たちがいるということも言われていて、義経伝説にはあまり触れないほうがいいというようなのが東北地方では伝わっているというようなことも、ものの本に書いてあります。ですが、私はもう少し事実にも則して義経伝説を見てみたいということで百十カ所、もっと増えるであろう伝説を一つ一つ訪ねたいと思っています。それで、二つの視点で見ます。一つは文献的なものを可能な限り目を通す。それなりの話を見る。それは出版年ごとにずっと並べてやっていく。もう一つは、北海道の今の百十カ所。何回も言いますが、その伝承地はどうなっているかということをやったりきちんと押さえて、その上での自分の判断を持つべきかなという具合に考えています。

義経伝説には三つの時代区分というのがあってと思います。一つは江戸時代幕末期に一気に義経伝説が喧伝された頃です。それから明治から昭和二十年ぐらいまでに義経伝説が喧伝された時代。そして戦後ですね。高木彬光さんの『成吉思汗の謎』の本を契機にして佐々木勝三さんその他の方々の戦後の活動があります。北海道にも北海道義経ロマンの会という形で取り組んでおられる方々があって、年一回ずつ総会をやったり、町ぐるみで活動しているところもあります。その江戸期のことについては、こちらにおられる平山氏の論文があります。ただ、それを一つ一つ私も平山氏の調べられた論文を土台にしながら江戸期の方ももう少しきちんとやらなきゃならないなという思いでいます。平山氏は非常に義経伝説の内容をよく分析なさっていると思います。私は今日お話しするのは、この明治期の、日本が明治維新になってから昭和二十年までの間に果たした小谷部全一郎という方のことをどうしても興味が湧いてくるんです。それに関する優れた文章を書いておられる方もいますので、その方の紹介をしながらお話ししたいなと思っています。

最初に岩崎克巳という人を紹介いたします。義経伝説の文献目録作りの過程で知りました。昭和十八年の時点で義経伝説についての書誌をまとめた方です。この方は昭和十八年段階までの義経伝説についての文献に目を通しておられます。この方は昭和十八年に召集されます。戦地に行く前にまとめられたのです。その本を見ていまして小谷部全一郎という人に興味を持ちました。小谷部の仕事を見ると、日本の近代国家を作り上げていくときに、やはりどうしても日本人の心とか精神性とか、そういうものと義経伝説が結びついている、また利用しようとした部分があるんじゃないかということに気づき始めました。そして小

谷部のことを調べ始めますと、やっぱり小谷部について、岩崎と同じようによく研究なさっている方がいることを発見いたしました。釧路の方で浦田広胖氏です。『明治のアイヌ・インディアン認識—明治期の知識人と先住民族—民族問題叢書1』という本を出版しておられます。奥付に釧路市愛国東と書いてますから釧路の方です。浦田氏は1990年8月31日に出版しているのです。本の後半の部分に小谷部のことを詳しく述べています。この浦田研究について今日紹介したいと思っています。

小谷部全一郎の生涯は、1868年(明治元年)から1941年(昭和16年)までです。教育家、柔術家、秋田県生まれ。十四歳のときに上京して1888年(明治21年)米国へ渡米。エール大学などで神学を学ぶ。アメリカンインディアンとアイヌとの境遇の類比に心を動かされ、アイヌ教育を天与の使命と自覚する。1898年帰国後直ちに北海道旧土人教育会を創設する。東京神田三豊町のキリスト教青年会館での大演説会で小谷部のラジオを聴き、生涯の方針を決めた学生がいた。これが白井柳治郎、アイヌ教育者である。1901年(明治34年)、白井を伴い北海道に渡り、胆振の虻田の地にアイヌ子弟のための小学校を設立しようと奔走する。白井を専任教員に推薦すると同時に婦人及び幼い長男を呼び寄せ、虻田に定住。北海道全域から選抜された義務教育終了後のアイヌの青年たちに、職業教育を行う虻田実業補習学校を建て、吉田巖をその教師に採用した。だが、その心魂を傾けた努力も実らず、在住八年で失意のうちに退道。後事を吉田と白井に託した。その後は、東京府荏原郡大井町で「成吉思汗ハ義経也」などの奇説を発表する。これが略歴です。補足しますと、アメリカに行って神学を学んで、キリスト教の影響を受けています。そして、アイヌ民族に出会って、そしてこれを八年でやめて戻って國学院に入りなおします。それは神道になりますね。神道について学んでいます。それ以後、アイヌ学校を辞めて、虻田の方を辞めていってからは、アイヌ教育には携わらなかったというような人です。義経伝説関係では、大正十三年に『成吉思汗ハ義経也』という本を出版しています。青木純二の『アイヌ伝説其情話』出版と同じ年です。小谷部の義経本は、いろいろと版があって、『興亜国民版 成吉思汗は義経なり』、これは昭和十四年六月版です。定価一円三十銭です。当時の一円三十銭といったらかなり高いと思います。厚生閣というところから刊行しています。『日本及び日本国民の起源』という本も昭和四年一月に出版しています。この本では、日本人の起源はヘブライ人だと言うんです。そういうような論調でずっと書いているのです。「成吉思汗ハ義経也」という本を再版します。そして虻田から東京に行ってから國学院に入り直し、宮内庁の仕事に携わっています。そして義経伝説について本も出しているのです。ある意味では秋田生まれの小谷部全一郎がどういう思想的な経過をたどっているかということも興味がありますし、同時にそれがどうして義経伝説なのかということにも興味が出て来ます。しかもそれが大正十三年ぐらいにこの本が出て、そしてそれがブームを起こして、これが反論とかいろんなものが出てくるというようなことになるんですね。それは

日本の近現代社会が出来上がって行く過程と影響がないのかどうかという問題なんかも考えられるんじゃないかと私は思うのです。

金田一京助を始め、それから吉田巖、それから深瀬春一、島津久基という国文学者の義経伝説研究とどう違うのか興味を持ちます。金田一京助については、金田一京助全集の第九巻に義経伝説に対する論文が五つ出ています。金田一京助は北海道における義経伝説の整理ということで、次のような要素が成立すると書いています。①は地名に対する邦人の民族語源の要素を持っているものとか、江戸本来の神話のヒーローに偶然親しく義経や弁慶を連想させるような下りがあるので、それを見替えて考えて早く義経と語談した要素とか。我が古い伝説、いわゆる御伽草子の御曹司島渡りの内容が比較的早くこの地に入ってきてこの地に定着した形です。あともう一つは信仰的なこと等というように客観的に整理されています。それから文献的に見ようとした先ほどの岩崎克巳もそうです。吉田巖もそうです。去年ですが十月に帯広図書館に行きました。帯広図書館で今帯広教育委員会が出版している双書がありますが、まだ刊行されてない部分に吉田巖の義経伝説に関する資料がありました。吉田巖の資料がフィルムに撮られてあります。そしてそれを写真に撮っていいですかって言ったら、これはまだ刊行されてないから、また遺族の了解がないから撮ったらだめですという具合に言われました。それで私は要点だけメモっては来しました。それを見ますと、大正六年段階に吉田巖は、金田一がやったような形で自分で整理しています。義経伝説を。リアルな目で、あるいは客観的な目を持つようとして努力している姿勢が見えます。それから永田方正さんもそうですね。永田さんも同じような形で、リアルな目でアイヌ語から義経伝説はどうなのかとかいろんな形で調べています。ですからそういうような形で、小谷部さんとはまた違った形でそのものを単なる作り事とかなんかっていうことじゃなくて、それを真面目に受け止めながら、それを客観的に捕らえようとする努力もあった。その両方の流れの中で小谷部さんが果たした役割みたいなところが浮き彫りにもなってくるんじゃないかと私は思います。私の思いはまだ結論づけてませんけれども、とにかく北海道に百十以上ある義経伝説内容、文献を調査・検討することを通してからだと思っています。それまではまだ結論出せないなと思っています。だが自分の思いの中では仮説みたいなのがぐっと渦巻いていることは確かですね。そんなようなことで小谷部さんのことを見ることもまた大切なことじゃないかなと思います。大正十三年、『成吉思汗ハ義経也』というこの本が出来上がって、そして戦後に猛烈に売れたわけですね。これも調べてみたいです。この本が何万部ぐらい売れたのか。調べてみる必要があると思います。つまり影響力の問題を研究したいですね。なぜかと言うと、小谷部全一郎は、最終的な結論で、浦田さんの言うところと言えば、アイヌ民族の子弟をいわゆる職業訓練をしなければならないと。そして一生懸命自立させるような方向にしなければならないということで虻田に学園を作ったのです。その時に募集したんですけれども、しかし二十二名ぐ

らしいか集まらなかったんです。だけど、いろいろと頑張った。でも自分の思惑とは違ったものだから投げ出したみたいな形で結果的にはそこを出ていくという形になっていくんですけど。彼の思惑を見ていくと、アイヌの子弟たちを教育して、その教育した子弟を大陸に連れて行き、満蒙開拓団等の大陸開拓に従事させるという考えなんです。そういう自分の思惑が結局挫折して行くのです。最初から自立を計るという姿勢じゃないわけですね。同じ自立でも自分の都合のいい自立、自分の思想に、思いに準じるような子弟を作っていくかという形での思惑ですから。しかも、親としては子供たちを手放すといったって大変だと思うんです。自分達の生活の問題も含めて。だからいろんなことが重なって彼は失敗して、それを吉田、白井に任せてしまったと言えるようです。そんなことを考えながら、浦田さんは「終わりに」という部分でこういう具合に書いてます。ちょっと読んでみたいと思います。

「高倉新一郎だけではなく、例えばバッチェラーや金田一京助、児玉作左衛門、更科源蔵、それに吉田巖などのアイヌへの関わり方を問い直し、問題点を抉り出し、その肯定面と否定面を明らかにしていくことが必要な時期にきているといえると思う。」こういう具合に指摘しているのです。そして、「どうしても指摘しておきたいのは、アイヌ民族への関わり問題は、単にアイヌだけにとどまらず、日本が他民族、異人種とどう関わっていくかという課題にもつながっていくのである。明治以降の近代国家日本は、こと民族問題に関しては、排外主義、国政主義を一步も出なかった。アイヌを犬と象徴した日本人は、中国人をチャンコロと呼び、朝鮮人を朝鮮と蔑称し、ロシア人をロ助、第二次大戦ではアメリカやイギリスを鬼畜米英とのしり、白人を毛唐と呼んだばかりか一律にスパイ視した。忘れてならないのは、こうした蔑称を国の支配層が意識的に作り出し、国民各層に意図的に広めたことである。二十世紀も終わりの今、支配層はこうした他民族蔑視政策を意識的には採っていないかのように見える。だが、本当にそうだろうか。学校でも社会でもまだアイヌ部落民や朝鮮人への差別と偏見が残り、陰湿ないじめや明白な就職差別、結婚、まだまだ存在する。他国民を蔑視、とりわけ黒人やアジア系への意識的な差別は、引き釘さえあれば海面が水を吸収するように国民全体にじわっと受け入れられる心情的土壌が否定しようもなく存在する。総理大臣が他民族蔑視な発言を行い、続いて我が国は単一民族国家と発言している。」と厳正に浦田氏は指摘しています。

小谷部全一郎は陸軍のひとつの調査としてずっと満州を調べているんです。そしてその中で恐らく陸軍を背景に持ちながら調べて、そしてそのものが更に義経成吉思汗説を進めているのです。ですから、私のテーマはね、どこまでも膨らんで行きます。東アジアに対して日本が大東亜共栄圏だと言って大陸進出して行った時、この義経伝説をどう扱ったのかなと。いわゆる文化政策はどういう風に持ったか。植民地政策に対してたくさん神社を建てたり、強制的に日本語を使わせたり、現地語を使わせなくしたり、いろ

いろと名字を変えたり、いろいろとするわけだけど、そのような中で、この義経伝説を大陸の中でどうやって有効に利用していったのか。私は興味があります。日本の義経は成吉思汗だと、同じ仲間なんだと、同じ同胞なんだと、そして日本人が起源だというように喧伝したのだと思います。江戸時代からこのような考えがあるのだと思います。清朝の清は、清和源氏の清だとか言うような形で創作して行くのです。それが江戸時代からあったにしても、日本人の意識の中にそういう大陸意識っていうのか、大東亜共和圏意識っていうのが常にあるんだろうと思います。このような国民意識と義経伝説は結びついているかもしれない私は思うのです。日本の近現代史の中で見ていった場合に、もっと義経伝説だけに留まるんじゃなくて、それを生み出した時代背景、小谷部全一郎がこれほどまでに義経成吉思汗説に関する本がたくさん売れていく、そしてその読者がいるということなんかをもっとリアルに見て置く必要があるんじゃないかと思っています。義経伝説を利用していった国家政策と視点からも研究しなければならないと思っています。

そろそろまとめをしていきますと、江戸時代にアイヌ民族を同化するっていうか、自分たちのものにしていくという思想と、また満州も同じような形で義経成吉思汗説で同化する思想とは同質だと思います。その辺の関連を含めて考えてみる必要が今後あるのではないかと思います。確かに民衆、庶民はやっぱり義経に対する判官最良のものがある。江戸で盛んになった御曹司島渡りだとかその他のものもある。そして、昔の小学校国定読本などには八艘跳だとか京の五条のとかって教科書にも載る。そういうような庶民の義経像、義経伝説そのものの自体を利用しているということが言えるのではないかと思います。

それで、私はもう少し明治時代から小学校読本とか或いは昭和の9~12年頃に作った校長会が中心になった郷土読本、各小学校の郷土読本とかをもっともっと調べてみる必要があるのではないかと思います。課題はいっぱいです。そういうような形で、こういうことが言えるんじゃないかということまでは言いませんけど、しかし、いろいろな切り口があるのではないかということだけは今日の中でお話しできるのではないかと思います。

このように考えて来ますと、先ほど一講目でお話しした青木純二のたかが「アイヌ伝説」だけと同じ背景があるのではないかということが言えると思います。青木純二の関して『新聞人名辞典』で調べてみると、大正十三年と大正十四年と昭和二年の三回ほど青木純二というのが出ています。そして青木純二の本名は中尾兵志っていうんです。当時、東京朝日新聞高田支局で、以前には函館新聞に勤めています。そこでアイヌ文化と知り合ったところ書いています。私が面白いと思ったのは、この『新聞人名辞典』に青木純二は「皇室中心主義」と出ているんです。生年月日とかいろいろ記載されています。他の人々を見ると、「人道主義」だとか「国家主義」だとか「そんなものはない」というようなのが書いてあり、これが当時の新聞記者の人た

ちの思いがわかります。そういうことから見て、青木純二の思いがわかります。それから同じように中田千敏も報知新聞の記者です。工藤海次郎だって小樽新聞の記者です。河合裸石だって北海タイムスの記者です。これらの人たちが「アイヌの伝説」ということを本で著したりなんかしているわけです。同時に今言った小谷部のような形で北海道の義経伝説を出版しているわけです。だから私は小谷部は積極的に義経伝説を国家政策の下で利用していたと思います。アイヌ民族を利用していったという浦田さんの説は今のところ私は、今のところはですよ、そう頷けるんです。青木はどうだった。国家主義ってあるけれども、それは意図的ではなかったかもしれない。アイヌ文化に触れて素晴らしいなと思って、これは残さなきゃなって思ったけれども、しかし思った中には問題があった。全く日本のロマンチズムというか、美意識というか、その上でアイヌ文化を理解しようとした。金田一その他の方々は、アイヌ民族の遺産そのものに接近しながら再話しようとした。いろいろな流れがあるのではないかということを私は思うのです。私は「お前はどうなんだ。」という問題があります。わたしの今後の研究になると思います。

最後に、浦田さんの文章を読んで終わりたいと思います。

「義経伝説は、確かに浪漫満ちた魅力を持っている。正統的な歴史学では義経は千八百九十九年元治五年四月三十日、奥州は平泉の衣川で藤原泰衡によって攻められ、三十一歳の若さで死んだとされ、決着がついたとしている。しかし、歴史学者が何と言おうと、庶民の中には何百年にも亘って義経は死なずに北海道に渡ったという言い方や史跡が残されている。それに現在でも生きた義経の活動空間はどんどん広がっている。東北・北海道の義経史跡を繋いで観光ルートを作り、ツアーを組むなどの企画も年々盛んになってきている。という罪のない楽しい歴史ロマンであるうちは、義経伝説は何の問題もないと言えよう。ただ、心しなければならないのは、この楽しい歴史ロマンを巧みに利用して日本の対外進出を肯定する土壌を培養し、他国侵略のイデオロギーを助長とする謀略がわずか数十年前にあったのだ。小谷部全一郎が陸軍の密かな援助の下に満州蒙古の義経史跡を調査したことは忘却の彼方に押しやっていいほど過去のことではない。小谷部全一郎といえばその著書『成吉思汗・義経也』や『日本および日本国民の起源』が最近また再販されていることも見逃すことはできない。前者は義経伝説の古典と思われるべきものであり、その意味で再販の利用なしとしないが、後者は歴史書として全く無価値であり再販の価値も微塵もない。それでも再販されたということは、再販に価値ありとする勢力が今確かに存在することを意味する。」

云々というふうに書いています。だから、「たかが民話」ですけど、今まで述べてきたような面で何か私もお役に立てれば良いなと思っています。今後ともいろいろな面で教えていただきたいなと思います。研究が始まったばかりです。三時間近くなりますけれども、私の話は一応これをもって終わります。